

江戸時代の「東欧」イメージ

蘭学書と新聞報道を手がかりに

*柴 理子

はじめに

ある国や地域や民族に付着するイメージは、時にはその国や地域や民族の実態を反映するが、実態とは必ずしも関わりなく、往々にしてイメージする側の先入観や偏見から生まれるものである。しかも、いったん出来上がったイメージは歪曲、誇張、自己投影という過程を経て、新たな類型を生み出していく。⁽¹⁾したがって、他国や他民族に対するイメージを検証することは、自らの価値観や世界観を省みる作業に他ならない。

「東欧」という名称が日本においてはヨーロッパ東部という単なる地理的概念としてよりむしろ政治的概念として定着し、しかもどちらかといえばネガティブなイメージで用いられてきたことは、多くの論者によってしばしば指摘されるところである。筆者の個人的体験から言えば、極端な場合は、そこにどんな国や地域があるのかも把握されることなく、否定的な印象だけが一人歩きしていることすらある。

通常、この政治的概念としての「東欧」は、直接には第2次世界大戦後の「東欧」の社会主義化という事実と関連して成立したものと説明される。しかし筆者は、ポーランド史および日本・ポーランド交流史の研究に携わるなかで、「東欧」が日本人の意識下において「西欧」と峻別

*しば・りこ 東京情報大学総合情報学部情報文化学科専任講師

(1) 藤田みどり『アフリカ発見——日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、2004年、298-299ページ。著者は日本におけるアフリカ・イメージを歴史的視点に立って丹念に跡付けており、筆者も方法と史料の両面で大いに啓発された。

され周辺化されたのはもっと早い時期だったのではないかという感触をもっている。同じヨーロッパでも「西欧」とは異なるマイナーな地域というイメージは、いったいいつ頃から形成されたのか。そのような「東欧」イメージの形成にはいかなる要因が働いていたのか。それとは異なる「東欧」イメージの形成の可能性はどのように見つめとられていったのか。筆者は、日本・東欧交流史の展開とも突合せつつ、日本における「東欧」イメージがいかに形成され、変遷してきたかを跡付けることを長期的な課題としている。その際、諸外国に対するイメージの形成に果たすメディアの役割に着目し、当面の課題として、新聞というメディアがいかなる「東欧」イメージを作り出してきたかを実証的に明らかにしようとしている。

本稿の目的は、近代日本の出発点であると同時に日本の新聞の創成期でもある幕末という時代に、「東欧」がいかなるものとして日本に伝えられたのかを考察することにある。周知のとおり、江戸時代の日本人は、幕府による海外渡航の禁止（1636）や鎖国令（1639）のために、諸外国との直接の交流を制限されていただけでなく、海外情報に触れる機会も非常に限られていた。こうした状況は幕末も基本的に変わらなかった。日本で初めて新聞が発行されたのは1850年代半ばのことであるが、当時の日本において「東欧」に関するどのような情報が流布していたのかを知るために、第1章ではまず、鎖国下の日本に海外情報をもたらした数少ないルートの一つとして18～19世紀の蘭学者の著作に注目し、それらがヨーロッパ東部をどのように紹介しているかを概観する。第2章では、1850年代後半から60年代初めに刊行された初期の新聞で「東欧」がどのような形で報道されていたのかを検討する。

先行研究についてふれておくと、先駆的な仕事としては日本における東欧認識の変遷や東欧研究の概要を紹介したものはいくつかあるが、新⁽²⁾

(2) たとえば、以下を参照。南塚信吾「日本人と東ヨーロッパ」南塚信吾編『東欧の民族と文化』所収、彩流社、1989年、8-32ページ。同「日本と東欧」原暉之・外川継男編『スラブと日本』（講座スラブの世界第8巻）所収、弘文堂、1994年、351-372ページ。

間資料の詳細な分析に基づいて東欧イメージを論じた研究はまだ出ていない。その意味では、本稿にもささやかな貢献の余地はあると思われるが、筆者の作業は継続中であり、中間報告的な性格の論考であることをあらかじめお断りしておく。

1 蘭学者の伝えた東欧情報

新井白石『西洋紀聞』

上に述べたように、江戸時代においては海外事情を直接見聞することはほとんど不可能であったが、一部結論を先取りして言うなら、いわゆる漢籍やオランダの書物を通じて意外に多様な海外情報を摂取していた。この問題について、筆者は稿を改めてより体系的に検討する予定であり、本稿ではその一部を紹介するにとどめたい。

この時期、もっとも早くヨーロッパ東部に言及しているのは、おそらく新井白石(1657 - 1725)の『西洋紀聞』(1715)であろう。『西洋紀聞』は、1708年に単身渡来したイタリア人宣教師シドッティ Giavanni Battista Sidotti (1668-1715)の取り調べにあたった白石が、その尋問に基づいて執筆したものである。

書名には西洋と銘打っているが、ヨーロッパのみならずアジア、アフリカ、南北アメリカという「五大州」が対象とされ、内容も地理はもとより政治、国際関係、歴史、風俗など多岐にわたっている。ヨーロッパはイタリア、ドイツ、イギリス、スペイン、フランス、ロシアなど当時の主要国が記述の中心となっているが、ヨーロッパ東部についても、ポーランドが「ポローニヤ」もしくは「^{ポウロニヤ}波羅泥亜」という名称で登場し、その地理的位置が「ゼルマアニヤ(ドイツ)の東」と説明されている⁽³⁾。ポーランドについては同じ中巻にもう1ヵ所、「ポローニヤの君死して、ブランデブルゴ・リトアニヤ・ゼルマアニヤの三国、其国をあらそひ、ポローニヤの兵、戦死するもの七千人、ゼルマアニヤの兵もまた戦死す

(3) 新井白石著、宮崎道生校注『新訂西洋紀聞』中(東洋文庫)平凡社、1968年、

るもの二千人に及びき」というくだりがある。⁽⁴⁾これは、ポーランド国王のヤン3世ソビエスキの死去（1696）に伴う国王選挙と列強の介入、北方戦争にいたる経過を描いたと思われるが、スペイン王位継承戦争（1701-1714）を詳述している部分を受ける形で書かれている。文中に「此戦の事は、其説詳ならず」という但し書きがあり、また「リトアニア」についても「いまだつまびらかならず」と断っているが、同時代のヨーロッパ情勢への関心を伝える部分として興味深い。

ただしこの『西洋紀聞』は、下巻に当時禁制だったキリスト教の教義などに関する記述を含んでいたために出版を許されず、同時代には学者など一部の知識人の間でひそかに伝写されるにとどまった。明治15（1882）年に刊行されるまでの150年もの間、一般の日本人の目に触れることはほとんどなかったのである。

朽木昌綱『泰西輿地図説』

ヨーロッパ東部に関する情報がもう少しまとまった形で紹介されるようになるのは、18世紀後半に入ってからである。

1789年に成立した朽木昌綱『泰西輿地図説』は、6冊17巻からなるヨーロッパ地理書である。第1巻が「欧羅巴総論」、第15～17巻は地図や紋章などの資料が収められているが、第2巻以降は各国別にポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、オランダ、スイス、イタリア、ドイツ、スカンジナビア、ロシアが扱われている。特筆すべきことは、第11巻「波羅尼亞（ポーランド）」、第12巻「莫斯科未亜（ロシア）」、第13巻「翁加里亜（ハンガリー）」、第14巻「額勒濟亜（ギリシャ）」と、第5冊の4巻で取り上げられているヨーロッパ東部が全体の4分の1近くを占めていることであろう。

著者の朽木昌綱（1750-1802）は、前野良沢門下で蘭学を納めた人で

（4）同上書、61ページ。このことについては、『西洋紀聞』の少し前に書かれた『采覧異言』（1713年）にも「是年、又波羅泥亜君死。入爾馬泥亜、及肥良的亜・礼勿泥亜、各争其国。波羅泥亜人、死者七千。入爾馬泥亜、亦戦亡二千人」とある。同上書、317ページ。

ある。オランダ語に加えてラテン語、ドイツ語、フランス語も学んだ形跡があり、また丹波福知山藩主という地位にありながら、1779年に長崎出島のオランダ商館長として来日したイザーク・ティチング (Isaac Titsingh) と自ら進んで親交を結んだ開明的な大名だったことでも知られている。『西洋紀聞』に比べると記述が驚くほど詳細なのは、こうした背景があつてのことであろう。

東欧に相当する部分を見てみると、まずポーランドについては、「ドイツランド」の東方にあつて、西は「シレシイ (シレジエン)」、東は「ミユスコピイ (ロシア)」、南は「オンガリヤ (ハンガリー)」「セペンベルゲン (ジーベンブルゲン。トランシルヴァニアのドイツ語名)」、北は「プロイセン」「クウルランド」に隣接するという具合に、地理的位置の説明からして、『西洋紀聞』に比べ格段に詳しくなっている。その風土は、「此国中スベテ豊饒ニシテ」野菜、材木、蜜、銅、鉄鋼、塩等を産し、「此外ニ於テモ亦諸物ニカクコトナク国用甚足レリ」とあり、人々は「勇ニシテ且和アリ諸芸ニ達シ又ヨク諸州ノ言語ニ通ゼリ」、戦乱が続いているにもかかわらず人口稠密である。さらに、その国土は王国「ポヲレン (ポーランド)」と大侯国「リタウ々エン (リトアニア)」に二分されていることが述べられ、行政区分に関する詳しい紹介がなされている。本書の成立は第1次ポーランド分割 (1772) の後で、ポーランドの国力が衰退の度を深めていた時期であるが、そのことには一切言及されていない。ポーランドの巻に付記されているプロイセン王国の部分、続くロシアの巻にも、ポーランド分割については記されていない。ただし、逆に言えば、明治に入ってから主流となる「亡国ポーランド」といったマイナスイメージはここにはまだ見られないということになる。

第13巻「^{オンガリヤ}翁加里亜」では、まずハンガリーについて「昔時ハ自立ノ王国ニシテ其領地甚多ク」、しかし「今時ノコトキハ多く『トルコ』ノタメニ破ラレテ其残ルトコロ甚少ナク……猶又『ヲタステンレイキ (オーストリア)』ノ属国トナレリ」と書かれている。さらに、ここで目を

(5) 朽木昌綱『泰西輿地図説』青史社、1982年、372ページ。

(6) 同上書、427-428ページ。

引くのは、「分州」として、『西洋紀聞』ではまったく記載のないバルカンの諸地域が細かく紹介されていることである。全部で11の地域に区分されており、そのうち10地域がバルカン諸地域に該当する。すなわち、①スラホニイ（スラヴォニア）②コロアチイ（クロアチア）③ボスニイン（ボスニア）④ダルマチイン（ダルマチア）⑤セルピイン（セルビア）⑥セペンベルゲン（トランシルヴァニア）⑦ワルラシイン（ワラキア）⑧モルダピイン（モルドヴァ）⑨ビュルガレイン（ブルガリア）⑩ロマニイン（ルメリア）について、それぞれの位置関係や風土、歴史が記されている。⁽⁷⁾

バルカンについてはさらに、第14巻「額^{ギリイケン}勒^{イケン}濟^{ケン}垂^{ケン}」（本文中では「ギリイケンランド」とも表記）にも記載がある。すなわち、「分州」の「其一」として「アルバニイン（アルバニア）」が扱われ、ダルマチアやセルビアやマケドニアと隣接していること、この国が大きく二つの地域に分かれること、という解説が付されている。⁽⁸⁾「分州」の「其四」には「マセドニイン（マケドニア）」の地理的位置に加えて、そこが「古へ『アレキサンデル』ノ大王ノ出生シタルトコロ」であること、しかし今は皆「トルコ」に属していることが記されている。⁽⁹⁾

総じて、朽木の『泰西輿地図説』は、地名の表記の統一がほとんど取れていないし、ヨーロッパの最新の情報が反映されているとも言いかねるが、鎖国下という劣悪な環境にあっても情報収集に手を尽くし、未知の事柄を可能な限り伝えようという意欲と熱意は評価されるべきものであろう。

司馬江漢『地球全図略説』『和蘭通舶』

朽木の『泰西輿地図説』とほぼ時を同じくして、司馬江漢（1747-1818）もいくつかの著書の中でヨーロッパ東部を取り上げている。

1793年に刊行され、1797年に増補版が出た『地球全図略説』がおそ

（7）同上書、431-444 ページ。

（8）同上書、446-447 ページ。

（9）同上書、448 ページ。

らくその最初のものであろう。朽木の網羅的な叙述に比べると司馬の叙述はいささか簡略で、1793年版では、ポーランドが「ポログネ」という名称でロシア、ドイツ、フランス、オランダ、イギリスとともに、米穀もとれない寒冷の地として紹介されているに過ぎない⁽¹⁰⁾。また増補版では、波羅泥亜が「北ハフロイセン及バルチヨウ海ヲ臨、南ハ翁加里亜ナリ、都城ヲカラユスト云、米不生トイヘドモ大小麦ヲ生ジ山塩ヲ出セリ、又大河ヨリ水牛ヲ産ス⁽¹¹⁾」という具合に若干詳細な地理的位置と風土の説明を付されているが、東欧に該当する部分としては他に、ハンガリー（翁加里亜）、ブルガリア（ブルガリヤ都ル格もしくはブルガリヤ）、ギリシャ（ギリイゲン）に関する記述が見られるだけである⁽¹²⁾。

『地球全図略説』から10年余を経て刊行された『和蘭通舶』（1805）は、世界地理書としては確かに内容がより充実したものになっているが、東欧に関しては扱われている国・地域に変化はなく、司馬の関心の範囲が特に拡大しているわけではない。

同書冒頭の「五大洲総説」には、司馬のヨーロッパ認識の一端が現れている。すなわちヨーロッパは「天下第一ノ大洲」であり「人類肇開ケ、聖賢ノ道首ルノ郷」である。ここで目を引くのは、スペイン、フランス、ドイツ、イギリス、ロシア、イタリア、ポルトガルとともに、翁加里亜都ル格、捕尔加里亜都尔格が「其著キ者」すなわちヨーロッパの主要国に数えられていることである。司馬はさらに「此諸国大概人物ノ氣質同ジウシテ、性温厚ニシテ躁シカラズ、亜細亜ノ人ニ比スレバ甚タ巧アリテ思深シ⁽¹³⁾」と書いて、ヨーロッパを礼賛する。

司馬はポーランドもヨーロッパの主要国として扱っている。『おらんだ俗話』（1806）においては、「ホーレン」（ポーランド）をトルコ、ロシア、イタリア、ドイツ、フランス、スペイン、イギリス、オランダと

(10) 司馬江漢『地球全図略説』（寛政五年版）、『司馬江漢全集三』八坂書房、1994年、24ページ。

(11) 司馬『地球全図略説』（寛政九年版）、『司馬江漢全集三』110ページ。

(12) 同上書、111ページ。

(13) 司馬『和蘭通舶』、『司馬江漢全集三』所収、152ページ。

ともに「欧羅巴諸洲ノ著シキ者」として挙げている。⁽¹⁴⁾いくつかの著書を読んでみると、司馬のポーランドに対するこうした認識が天文学への関心から発していることが窺われる。司馬はポーランドのトルン (Toruń) 出身のニコラウス・コペルニクス (ラテン語名 Nicolaus Copernicus。ポーランド語ではミコワイ・コペルニク Mikołaj Kopernik) に強い関心を持ち、早くも 1796 年の『天球図』と『和蘭天説』の中でコペルニクスの地動説を紹介している。⁽¹⁵⁾『おらんだ俗話』と『和蘭通舶』のポーランドに関する箇所もコペルニクスと関連づけて書いており、他にもその例には事欠かない。⁽¹⁶⁾1808 年には『天球図』の刊行から 10 年以上も経っているにもかかわらず、その付録として地動説の解説書『刻白爾天文図解』をわざわざ出版しているほどで、このなかにもポーランドに触れている箇所がある。⁽¹⁷⁾

このように、司馬も東欧をヨーロッパの他の部分と区別して論じているわけではない。これは、関心が政治や経済や軍事などに偏らず、むしろ文化的側面に注がれているためではなかろうか。

(14) 司馬『おらんだ俗話』、『司馬江漢全集三』所収、121 ページ。

(15) 司馬『和蘭天説』、『司馬江漢全集三』所収、58-59 ページ、および同『天球図』同上書、95 ページ。

(16) 「西洋の内『ハウレン』と云国に『ヘイコッポハーリンコーペルニキユス』と云人、天説を究め、此地球も五星の如き星にて、一日に一旋りして一昼夜をなし、日輪ハ却て動き旋らず、其日輪を地球か一周して一年をなすと云説ハ、(中略) 彼国にてハ二百年以前の古説ニして小童も笑事なり (後略)」同上書、122 ページを参照。「蘭曆一千四百七十二年に当テ波羅泥亜国 (又ホーレン。トヨブ) 「トホールン」ト云所ノ人、刻白泥ナル者、日月五星ノ旋リヲ考究メ、日輪ハ中心ニアリテ天ノ動き旋ラズ、天ノ旋ルハ大地ノ動き旋ルナリ (中略) 及ビ五星モ吾地球ト同ク日輪ヲ一周旋シテ一年ヲナシ、衆星恒天ノハ常ニ動き旋ラズ、是ヲ地動ノ説ト云」同上書、153 ページ。また『天地理譚』(1816) にもコペルニクスおよび地動説に関する記述がある。『天地理譚』同上書、283-284 ページを参照。

(17) 司馬『刻白爾天文図解』、『司馬江漢全集三』所収、219 ページ。

山村才助『訂正増訳采覧異言』（1803年）

司馬江漢とほぼ同時期、ヨーロッパ東部についての興味深い記述を残した人物に山村才助がいる。山村が1803年に発表した世界地理書『訂正増訳采覧異言』は、全12巻から成っているが、「巻之二」でポーランド、「巻之四」でボヘミア、ハンガリー、ギリシャ、「巻之五」でバルカンを扱っている。

山村の叙述の特徴は何よりもその厳密さにある。例えば、ポーランドの国名一つとっても、ラテン語の「ポロニア」、フランス語の「ポログ子」、英語の「ポオランド」、オランダ語の「ポオレン」「ポオル」に加えて、「波^ネ兒^ス加^カ」というポーランド語の原語読みまで併記している⁽¹⁸⁾。筆者の知る限り、江戸期に書かれた数ある地理書の中でもここまでの厳密さは他に例をみない。

同書のいま一つの特徴は、地理書としてはかなり詳細な歴史叙述を試みていることである。例えば、ポーランド王国とリトアニア大公国が結びつきを強める契機となった、リトアニア大公ヴワディスワフ・ヤギェウォのポーランド王位継承（1386）に関しても、「コレ（王国波羅泥亞と大公国里都亜尼亜一筆者注）昔ハ別国タリシガ千三百八十六年ニ其公^{リトアニア}ウラヂスラウス^{ヤゲロ}ヤゲロナル者波羅泥亞国ノ王位ヲ嗣ギテヨリ始テ合メートナレリト云」と複雑な人名の漢字表記に苦心しつつ史実を丹念に記している⁽¹⁹⁾。また、「国中ノ貴官皆勢威アリテ各兵馬ヲ擁ス」ことや、彼らが「王都加^{カラ}蟬^{コウ}哥^ウ鳥^ウ及ヒ^ウ微^{イル}尔^ナ那^{ダント}。蕩多悉机^{シグ}等ノ地ニ会衆シ政事ヲ議定」することにも言及し、シュラフタと呼ばれる貴族が政治・経済・文化・社会のあらゆる面で権勢をふるい、「シュラフタ共和国」と呼ばれた当時のポーランドの体制の特徴も見逃していない。

山村はそもそも冒頭でポーランドを「欧羅巴洲中ノ一大国」としているのであるが、叙述自体もアウグスト2世（在位1697-1733）の死後に

(18) 山村才助『訂正増訳采覧異言』（上）青史社、1979年、243ページ、および245-246ページ。

(19) 同上書、246ページ。

(20) 同上書、249-250ページ。

起こったポーランド継承戦争（1733-35）、及び「今ノ王ニシテ^{アウグスト}垂烏^{トス}吾斯都斯ノ第三世（アウグスト 3 世）」の即位（1738 年としている）までで終わってしまっている。本書成立時にはそれからすでに約 70 年が経過し、その間に 3 回の分割を経てポーランド国家が消滅していたにもかかわらず、「其国後太平ナリ」と結ばれている。⁽²¹⁾鎖国による情報不足とそれに起因する現状認識のずれをもっとも感じさせる部分である。

この『訂正増訳采覧異言』では、他では詳細が語られることの少ないボヘミアが独立項目として扱われ、比較的詳しい紹介がなされている。「此国（ボヘミア一筆者注）四面大半^{セルマニア}入^ル馬泥^{マニア}垂ノ地ニ包マルト雖モ古ヘヨリ別国ニシテ土人ノ言語モ亦同シカラズ」⁽²²⁾という指摘に見られるように、山村がこの地域を単にヨーロッパ列強の被支配地域として見るのではなく、その民族や文化の多様性や独自性に目を向けていることは特筆に価する点であろう。

しかし他方、バルカンについては主として「卷之五」のトルコ（都児^{トル}格^コ）の項で語られ、一部は卷之四のハンガリー（翁加里^{オンガリア}垂）とギリシャ（厄勒祭^{グレシア}垂）の項にも入っているという具合に、記述箇所自体が分散している。しかも、卷之五は卷之六とともにアフリカの紹介にあてられているのであるが、何故かここにトルコが含まれているのである。山村自身も「都児格ヲ以テ^{アフリカ}垂弗利加ノ部ニ入ル者ハ甚非ナリ」⁽²³⁾と書き、また「都児格ノ都ハ欧羅巴洲厄勒祭^{グレシア}垂国ノ羅馬泥^{ロウマニア}垂ノ内ニ在リ」⁽²⁴⁾といった混乱も見られ、地域区分には頭を悩ませたようである。結局のところ、トルコがアジアからヨーロッパ、アフリカにまたがる大国であることから、「^{エウロパトルコ}欧羅巴都児格」「^{アジアトルコ}垂細垂都児格」「^{アフリカトルコ}垂弗利加都児格」の 3 つに区分するという結論に落ち着いている。⁽²⁵⁾東はエーゲ海、黒海、マルマラ海、北はハンガリー、モルドヴァ、ワラキア、ポーランド、西はアドリア海、南

(21) 同上書、257 ページ。

(22) 同上書、558-559 ページ。

(23) 同上書、594 ページ。

(24) 同上書、595 ページ。

(25) 同上書、606-607 ページ。

は地中海に囲まれた地域と説明されている「^{エウロツパトルコ}欧羅巴都児格」が、いわゆるバルカンに相当するが、このような記述からバルカンをヨーロッパの一部と理解した読者はいったいどのくらいいたであろうか。ただし、地名の読み方に限っていえば、^{マセドニア}馬則多泥亜（マケドニア）、^{アルバニア}亜尔百泥亜（アルバニア）、^{ロウマニア}羅馬泥亜（ルーマニア）、^{ビュルガリア}歩尔葛利亜（ブルガリア）、^{ベッサラビア}別沙喇皮亜（ベッサラビア）、^{セルビア}設尔喜亜（セルビア）、^{ボスニア}撲斯泥亜（ボスニア）、^{クロアチア}哥羅亜低亜（クロアチア）、^{ダルマチア}大尔馬祭亜（ダルマチア）、^{モルダヴィア}莫尔大未亜（モルドヴァ）、^{ワラキア}哇刺西亜（ワラキア）など、現在日本で用いられているものにかかなり近いことに驚かされる。

2 黎明期の新聞に見る「東欧」

開国と官製新聞の誕生

蘭学者の著書と並んで海外の出来事を伝えていたものに、長崎出島のオランダ商館が年に1回幕府に提出する『阿蘭陀風説書』という海外ニュースの集録があった。ただしこれは、老中以上の高官しか閲覧できない機密として扱われていたため、一般庶民はもとより下級武士ですら見ることはできなかった。こうした状況によりやがて変化の兆しが現れるのは、1853年、ペリー来航を契機として幕府がアメリカと通商条約締結の交渉を開始してからである。海外情報の開示に対する要求がにわかに高まったため、幕府は各藩に『阿蘭陀風説書』の伝写を許可するにいたったのである。⁽²⁶⁾

1860年代に入ると初めて「新聞」と名のつくものが誕生するが、しばしば指摘されるように、幕府による上意下達という海外情報の伝達形式の基本線は変わらなかった。1858年、幕府は欧米列強の圧力に屈して鎖国政策を放棄し、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの5カ国と修好通商条約を締結、1860年にはさらにプロイセンとも

(26) 小野秀雄「我国初期の新聞と其文献について——本書に採録せる新聞及書籍の解題に代う」明治文化研究会編『明治文化全集』第18巻新聞篇、日本評論社、1992年、3ページ。

条約を結ぶ。攘夷派が台頭してきたこともあり、幕府は自らの政策の正当性を主張するためのメディアを必要とした。こうしたなか、1962年1－2月に刊行したのが『官板バタビヤ新聞』であつた。⁽²⁷⁾ここでも情報提供者となつたのはオランダであつた。条約締結国のオランダは風説書の提出を中止したが、代わりに、バタビヤ（現インドネシア）で発行していたオランダ東インド総督府機関紙『ヤヴァッシェ・クーラント』（Javasche Courant）を献上したのである。『官板バタビヤ新聞』は、『ヤヴァッシェ・クーラント』の1861年8月31日付～11月16日付の分を幕府の番所調所（のちに洋書調所、さらに開成所と改称）が抄訳・印刷し、書籍商の萬屋兵四郎（のち福田敬業）に販売させたものである。1862年1月に巻一から巻十二まで、2月に巻十三から巻二三までが発売された。⁽²⁸⁾不定期の発行といい、半紙数十枚を綴じた冊子という体裁といい、新聞というよりは書物に近いものだったというが、幕府という為政者のプリズムを通したものとはいえ、当時の人々にとってはじかに海外情報を得られる画期的なメディアとなつたのである。⁽²⁹⁾

オランダ語からの翻訳新聞とほぼ並行して、上海、香港、寧波などで発行されていた中国語新聞も、番書調所で訓点を施され刊行された。『官板中外新報』、『官板六合叢談』、『官板中外新報』などがこれにあたる。発行年自体は、これらのほうが『官板バタビヤ新聞』より早い。

このように、黎明期の新聞はオランダや中国を主な情報源としていたのであり、その点においては蘭学者の著作と共通していたといえよう。開国後から明治にいたる時期の新聞によって東欧に関するどのような情報が日本に伝えられていたのか、次節以下で実際の掲載記事を検討してみる。

(27) 乾照夫「江戸から明治初期」有山輝雄・竹山昭子編『メディア史を学ぶ人のために』所収、世界思想社、2004年、42ページ。

(28) 北根豊編『編年複製版日本初期新聞全集』第1巻、ペリかん社、1986年、序xiページ。

(29) 乾、前掲書。

『官板六合叢談』『官板中外新報』

筆者の調査はまだ中途であるが、これまで見たところでは、日本で初めて東欧関係の記事を掲載したのは、1957年3月発行の『官板六合叢談』ではないかと思われる。ヨーロッパ情勢を伝える「泰西近事述略」の欄でロシアの鉄道建設計画が紹介されており、5系統のうち2路線が哇肖^{ワルソウ}（ワルシャワ）、各弗諾^{カフノ}（コヴノ）という旧ポーランド領の都市とプロイセン国境を結ぶ計画であることに触れている。⁽³⁰⁾ただし、この記事はロシアの鉄道建設計画を高く評価し、中国もこれにならうべきであるというのが趣旨であって、当時ワルシャワとコヴノがすでにロシア領となっていたことなどは一切言及がない。アヘン戦争（1840）以来、欧米列強の侵略に苦しんでいた前近代的帝国の中国は、クリミア戦争（1853 - 56）で列強から苦杯を嘗めさせられた同じく前近代的帝国のロシアに自らを重ねあわせ、その大々的な近代化の試みに注目していたのであって、⁽³¹⁾その支配下の諸地域・諸民族はとくに関心を引かれる存在としては映らなかったであろう。

『官板六合叢談』の元になった中国語新聞はイギリス人宣教師によって、また『官板中外新報』の原紙はアメリカ人宣教師によって、それぞれ上海と寧波で創刊されたものである。⁽³²⁾すなわち、これら二紙に掲載された記事には、欧米列強および中国の視点という二重のフィルターがかかっていることになる。また、これらの新聞はキリスト教の布教がそもそもの目的であったことから、キリスト教に関する記事が数多く掲載されていたようであるが、キリスト教禁制の幕末日本で翻訳される過程でその部分もそぎ落とされていった。初期の新聞のヨーロッパ東部に関する報道は、記事自体がごく少数でしかも断片的であるが、あるいはこのあたりにも一因があるのかもしれない。

そのような断片的な記事がどの程度、幕末の日本人の記憶に残ったかどうかは疑問であるが、東欧に関する数少ない新聞報道にもすでに一定

(30) 『官板六合叢談』安政4年2月、同上書、13ページ。

(31) 藤井省三「華字新聞四紙訳者付記」、同上書、vii-viii ページ。

(32) 卓南生「官板華字新聞および中国語原紙について」、同上書、v-vi ページ。

の傾向が見られる。この時期、政治的独立を失って周辺諸帝国の支配下に入っていた東欧に関する記述は、その支配国、すなわちロシア、オーストリア、ドイツ、トルコを扱った記事の中にしばしば現れる。東欧の諸地域・諸民族については、良きにつけ悪きにつけ、もっぱらこれら帝国の支配を揺るがそうとする反乱や抵抗がクローズアップされるのである。

1859年8月の『官板中外新報』には、当時ヨーロッパ国際関係の焦点となっていたイタリア独立戦争の経過が報じられているのであるが、1848年革命時のハンガリー独立戦争で敗北の憂き目に遭ったハンガリーが、同じオーストリアの圧制に苦しむサルデーニャの独立運動を支援していること、在米ハンガリー人もサルデーニャの応援に駆けつけていることが述べられている。⁽³³⁾ここでは、ハンガリー人の動きが否定的なニュアンスで語られているわけではないが、この後に定着していく東欧＝騒乱の地というイメージの最初のモチーフの1枚となったことは確かであろう。

『官板バタビヤ新聞』

『官板バタビヤ新聞』が創刊された1860年代初頭とは、ヨーロッパにおいては東欧を支配していた周辺諸帝国が対外戦争における敗北を契機に国内の再編に着手し、それに伴って東欧諸民族も民族的自立の方針の転換を余儀なくされた時期にあたる。同紙の創刊号はさっそく、1861年4～8月に開催されたハンガリー議会の決定について報じており、⁽³⁴⁾その後も帝国側の政策と諸民族の動静とを随時伝えている。

巻十二（原紙1861年10月9日付）は、「日耳曼」の項でハンガリー、「俄羅斯」の項でポーランド、「土耳其」の項でヘルツェゴヴィナとモンテネグロの情勢を伝えている。ハンガリーについては「近頃匈牙利の政事乱れて壤地利の命令に悖る者多し」と書き、ハンガリーが1848年革命時の方針に固執してハンガリー治下の「哥羅亞（クロアチア）、西ス

(33) 『官板中外新報』同上書、103-104ページ。

(34) 『官板バタビヤ新聞』巻一、同上書、195ページ。

ホニ- 拉窩尼（スラヴォニア）、^{ビイヘンベルゲン}七山（トランシルヴァニア）に暴政を施さん為る有様」であるため、オーストリア皇帝が「先年第二月及び第十二月⁽³⁵⁾に定めたる政法を硬く守るべし」と命じたことを伝えている。この件⁽³⁶⁾については、巻十四（同年10月16日付）に詳しい続報がある。しかし、オーストリアに従わないハンガリーに関する論調は概して批判的であり、巻十七（同年10月26日付）には、「匈牙利の風俗は古来より怠惰にして、事あるを厭ひ、総て成就すること少し⁽³⁷⁾」とすら書かれている。

1860年代初めには、ロシア領ポーランドにおいてもツァーリによる改革が導入されるが、これに対抗する形で対ロシア蜂起の気運が盛り上がる。ついには1863年1月の「1月蜂起」の勃発へといたるのであるが、『官板バタビヤ新聞』は蜂起前夜のロシア領ポーランドの騒然とした雰囲気⁽³⁸⁾を伝えている。巻十二はワルシャワからの情報として、「此地の形勢稍々平穩に赴け共下民の訴訟頻り」で一揆が全く止む気配のないことを報じている。さらに巻十八（同年10月30日付）では、ロシア皇帝アレクサンドル2世が事態の沈静化に手を焼いていることが記され⁽³⁹⁾、巻二十一（同年11月9日付）は、ついに「ポロニヤは兎角に凶聞のみ多かりき⁽⁴⁰⁾」と書く。巻二十一ではさらにポーランドとリトアニアの関係についても触れており、ポーランド王国の混乱がリトアニアに及ぶことを恐れたロシア政府が「リタウエンの諸地」に軍隊を出動させ、両地域の分断をはかっていることが述べられて⁽⁴¹⁾いる。

『官板バタビヤ新聞』ではバルカンの状況もトルコ情勢として報じられ

(35) 『官板バタヒヤ新聞』巻十二、同上書、245-246 ページ。なお、「先年第二月及び第十二月〔第十月の誤りか〕に定めたる政法」とあるのは、1860年10月の「十月勅書」、それに修正が加えられた1861年2月の「二月憲法」のことと思われる。

(36) 同上書、250 ページ。

(37) 同上書、257 ページ。

(38) 同上書、246 ページ。

(39) 同上書、262-263 ページ。

(40) 同上書、267 ページ。

(41) 同上書、268 ページ。

ており、モンテネグロ（モンテ子グレー、モンテ子グレイ、^{モンテ子ゴロ}蒙的尼）に関するいくつかの記事を見出すことができる。しかし、それはいずれもモンテネグロの住民とトルコの役人の小競り合いに関する報道であり、⁽⁴²⁾同紙に色濃く見られる不安定な地域という東欧のイメージをさらに裏打ちするものでしかない。ちなみに、『官板バタビヤ新聞』は文久元年12月分から『官板海外新聞』と名称を変えて刊行が継続される。文久二（1863）年に発行された巻五は「吉里米」（クリミア半島）の住民構成の変化について取り上げている。1861年から1862年にかけてクリミア半島の「韃人」（タタール人）23万2000人がトルコ領に移住し、そのあとに比佐拉比（ベッサラビア）、^{ベッサラビー}摩拉達維（モルドヴァ）、^{モルダヒー}襍拉幾（ワラキア）^{ワルラセー}などの人々が移り住んでいる。また^{ヒュルカリー}布加利人（ブルガリア人）もすでに数千人の規模で移住している、という。⁽⁴³⁾

以上、幕末から明治にいたる時期に発行された主要な新聞から、ヨーロッパ東部に関する記事を拾いながら見てきた。この時期の新聞においては、ヨーロッパ東部が「東欧」や「バルカン」といった何らかのまとまりをもった一つの地域として扱われているわけでも、またそのような名称が使われているわけでもない。しかし、前にも指摘したように、1860年代という日本の新聞の創成期がたまたまヨーロッパ東部にとっては激動の時代だったということを差し引いて考えたとしても、この地域に関する報道が、西欧諸国に比べてわかりにくい、不安定で混沌とした騒乱の地であるという印象を全体として醸し出すものとなっていることは否定できない。

いずれにせよ、これらの官製新聞は攘夷論が激昂してきたことによって短期間のうちに廃刊に追い込まれた。海外情報を含む新聞の発行が本格化するの⁽⁴⁴⁾は明治維新以降のことになる。

(42) 同上。および『官板海外新聞』巻之一、同上書、294ページ。

(43) 同上書、331-332ページ。

(44) 北根編、前掲書、i ページ。

おわりに

第1章で見たように、蘭学者たちは鎖国下の日本にあって、蘭学者たちは意外に偏りのない「東欧」情報を伝えた。その嚆矢となったのは、18世紀前半の新井白石『西洋紀聞』であり、17世紀末から18世紀初めにかけての、すなわちほぼ同時代のポーランドの状況が紹介されている。ただし、新井が取り上げているのは当時のヨーロッパ主要国の一つとしてのポーランドだけで、記述も断片的である。

18世紀後半になると、蘭学研究の進展にともなってヨーロッパに関する情報量が格段に増え、ヨーロッパの全域が扱われるようになる。ヨーロッパ東部についてもポーランドに加えて、ハンガリー、ボヘミア、バルカンなど、現在、東欧研究の対象とされている国や地域がほぼ視野に入っていると言ってよい。1789年の朽木昌綱『泰西輿地図説』では、全体のほぼ4分の1がヨーロッパ東部にあてられ、叙述もより網羅的である。

これに対して、朽木と同時代の司馬江漢の関心は主としてポーランドに注がれるが、ハンガリー、ブルガリア、ギリシャもイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、スペイン、ポルトガルとともにヨーロッパの主要国に位置づけられる。司馬はヨーロッパを開明の地として理想化してとらえ、ポーランドは画期的な発見をしたコペルニクスを生んだ国として度々言及される。

もう一人の同時代人、山村才助はこの時期ではもっとも詳細にヨーロッパ東部の状況を記述している。山村はポーランドをヨーロッパの大国の一つととらえ、同時代の状況までは追いきれていないものの、歴史に分け入って紹介している。

筆者は現段階ではまだ蘭学者の著作を網羅的に調査・分析するにはいたっていないが、その一部を見る限りにおいて、ヨーロッパは「西」と「東」といった形で区分されてはいないし、「西欧」「東欧」あるいは「バルカン」といった名称もいかなる意味内容においても使われていない。客観的状況として、東欧は18世紀末までにほぼ全域が隣接する4帝国、すなわちロシア、オーストリア、プロイセン、トルコのいずれかの支配

下に入っていたのであるが、そのことが偏見や先入観となって反映してはいないのである。

ところが、幕末に発行された新聞では、こうした印象は一変する。日本初の新聞が誕生するのは 1850 年代後半、欧米列強の圧力に屈して開国に踏み切った幕府が自らの政策の正当性を主張するために発行した官製新聞であった。

ヨーロッパ東部に関する情報が最初に現れるのは、1957 年発刊の中国語からの翻訳新聞『官板六合叢談』である。また、1862 年の最初の 2 ヶ月間に発行されたオランダ語からの翻刻新聞『官板バタヒヤ新聞』では、オーストリア、ロシア、トルコ、ドイツの情勢を伝える記事の中で、これら諸国の被支配地域となっていた東欧の動静が伝えられている。その多くはわずか数行の断片的な記事で、内容はほとんどが支配国に対する反乱や騒動に関するものばかりである。『官板六合叢談』の原紙はイギリス人の運営する新聞で、かたや『官板バタヒヤ新聞』のほうは大坂のオランダ総督府機関紙であったから、日本語に翻訳される以前にすでに欧米列強の視点というフィルターがかかっていた。そこにさらに幕府という支配者の視点が加わっているために、東欧関係の記事の論評は、どちらかといえば支配者側に立っているものが多く、東欧の側への理解や共感はほとんど見られない。東欧が他国の支配を受けるにいたった歴史的背景は書かれていないため、支配国に抵抗してその秩序を乱している厄介な存在という印象を生み出している。幕府の意図がどこにあったかはともかくとして、東欧に関するこうした報道が東欧のネガティブなイメージを生み出す最初のきっかけとなった可能性は否定できないように思われる。

以上のように、同じ江戸時代でも、蘭学書と新聞における東欧のとらえかたの間には大きな隔たりがある。現時点では明治維新前夜の 19 世紀前半の状況に不明な点が多い。今後の課題としてさらに調査を進めたい。

〔参考文献〕

- 新井白石著、宮崎道生校注『新訂西洋記聞』（東洋文庫）平凡社、1968年。
- 有山輝男・竹内昭子編『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社、2004年。
- 北根豊編『編年複製版新聞新聞日本初期全集』（東京大学法学部明治新聞雑誌文庫）
第1-12巻（全64巻）1986-1988年。
- 朽木昌綱『泰西輿地図説』青史社、1982年。
- 『司馬江漢全集』第3巻、八坂書房1994年。
- 明治文化研究会『明治文化全集』第18巻新聞編、日本評論社、1992年。
- 原暉之・外川継男編『スラブと日本』（講座スラブの世界第8巻）弘文堂、1994年。
- 藤田みどり『アフリカ発見——日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、2004年。
- 南塚信吾編『東欧の民族と文化』彩流社、1989年。
- 山村才助『訂正増訳采覧異言』青史社、1979年。